

都留市史

通史編

第一章 原始・古代

第一節 市域における最初の先住者

約二〇〇万年以前の更新世^{こうしんせい}に現世人類（ホモ・サピエンス）が出現し、最初に形成された人類の文化を旧石器文化、その時代をヨーロッパでは旧石器時代と呼んでいる。日本列島においても、戦後間もない昭和二三年、相沢忠洋氏によって群馬県岩宿遺跡^{いわじやく}が発見されるに及び、縄文時代以前の文化の存在が確認されることによって、旧石器時代における人類の生息が明らかとなった。その後、関東地方を中心としてローム層と呼ばれる赤土（火山灰土）の中から石刃、ナイフ形石器、槍先形尖頭器^{やりさきがたせんとうき}（石槍）などの打製の旧石器が出土し、次々と更新世に属する遺跡が発見されていった。すなわち、日本列島全域にわたって縄文時代以前の石器文化が普遍的に存在することがわかってきたのである。

この旧石器文化の時代を日本では「先縄文時代」^{せんじょうぶん}あるいは「先土器時代」^{せんどき}と称している（最近では「岩宿時代」と呼ぶ人もいる）。今から約一万二〇〇〇年以前の更新世氷河時代にあたり、寒冷期と温暖期が交互に四回繰り返した時代である。寒冷だった氷河期では、夏期の平均気温が現在より八〜一〇度低く、海面も一〇〇メートル

トルはど低かったと推定されている。現在では絶滅した北方系のマンモス象、南方系のナウマン象、オオツノジカ、毛サイなどの大形哺乳動物が棲息し、それらが先縄文人の食料の対象とされた。先縄文人は打製石器を用いた狩猟採集生活を営んでいたのである。

都留市域は富士山の東麓にあたり、桂川の形成する溪谷と森林に囲まれた豊かな自然が展開し、動物の棲息条件に恵まれた地域であったと考えられる。先史時代にはこうした水と食料に恵まれた豊かな自然環境を求めて人類も移住して行った。しかし、市内において先縄文時代の遺跡の発見は少なく、現在のところまだ二か所だけである。大幡所在の久保地遺跡に近い大幡川の断崖から細石刃・細石核・尖頭器という先縄文時終末期の段階に位置づけられている細石器が採取された遺跡と、昭和五年に発掘調査が行なわれて発見された大野の一杯窪遺跡である。一杯窪遺跡からは石器製作址と考えられる遺構が発見され、そこから石器の素材となる多量の縦長の剥片とその母石である石核などが出土している。この遺跡は放射性炭素(^{14}C)による年代測定によると約三万二〇〇〇年前という年代が出されている。

『都留市史 資料編』によれば、関東・中部地方の先縄文時代の石器群は、ナイフ形石器を指標として、

第一段階 ナイフ形石器の盛行する以前の時期

第二段階 各種のナイフ形石器が発達する時期

第三段階 ナイフ形石器とならんで尖頭器の出現する段階

第四段階 ナイフ形石器が衰退し細石刃の普及する時期

の四段階に分けられているが、一杯窪遺跡は第一段階の時期に属する可能性がある。一方、大幡川断崖の遺跡は第四段階に属し、先述のように先縄文時代の終末期の細石器文化の時期である。なお、この細石器文化はヨー

ロッパ、西アジア、中央アジア、北アジア、東アジアと広くユーラシア大陸を席卷し、北東アジアを通じて日本にも波及したのである。

したがって、現在、都留市域における最古の居住者は約三万二〇〇〇年前の先縄文時代における先縄文人といふことになる。なお、今後の遺跡の発見、発掘調査によって当該期の文化内容が次第に明らかにされていくものと思われる。

第二節 氷河期終了後の先史時代——先史文化の新しい段階

約一万二〇〇〇年前に氷河期が終了し、地球は温暖化に向い始めた。それに伴って海水面の上昇という現象をひき起こし、日本列島は大陸から完全に切り離され、ほぼ今日と同様な形をした日本列島が形成された。さらに温暖化による動・植物相の大きな変化が起り、人類の生活環境も一変することとなった。それは人類にとって食料資源の拡大という生存に適した環境となったことを意味している。したがって、狩猟、漁撈、植物採集など、人類の経済活動が活発化し、そのために各種の土器・土製品、石器・石製品、木器・木製品、骨角貝器・骨角貝牙製品など様々な道具が発明され、多用されたのである。

この中で特に土器の発明は画期的なできごとであった。土器は燃えることのない容器であり、食物の煮沸きや、水などの液体貯蔵に適した容器として用いられるなど経済活動の受皿として大きな役割を果たした。氷河期が「石器の時代」であるなら、この温暖期に入った時代は「土器の時代」ということができる。土器作りは火熱による粘土の化学的変化の発見があつてはじめて可能となったのであり、火熱によって強固になると同時に元に戻らない粘土の性質に関する知識を得たことがその契機となったと考えられる。

日本列島に出現した最初の土器は、深鉢形をした丸底、平底の土器で、単純な細い隆起文で飾られただけの「隆線文土器」(「豆粒文土器」と呼ばれるものであったが、その後に撚紐による文様を多用する土器の発達が著るしいところから「縄文式土器」(最近では通常略して「縄文土器」と呼んでいる。現在、この「縄文土器」の

研究は著しく発達しており、縄文土器の変遷に大きく五つの画期が存在することにより、草創期、早期、中期、後期、晩期の六時期に区分されるのが一般的である。なお、この縄文土器を特徴とする文化を「縄文文化」と呼び、その文化の時代を「縄文時代」とし、先の土器の六期区分を用いてさらに縄文時代を分期して、縄文文化の変遷をたどるための基準としている。

「縄文時代」はヨーロッパで「新石器時代」と呼ぶ先史時代の新しい段階にあると考えられる。更新世氷河時代の「打製石器」のみの石器時代(旧石器時代)と区別して、完新世になって新しく「磨製石器」(刃部及び全面平滑に研磨された石製利器)が登場した段階を新石器時代とするのであるが、後者においては特に農耕生産の存在が時代の指標となっている。しかし、ヨーロッパの新石器時代ではすでに農耕生産が広く行なわれているのに比べて、日本では磨製石器の登場している縄文時代において、現状ではまだ農耕生産を行なっている確実な証拠を見出すことができず、依然として狩猟、漁撈、採集の自然物獲得経済段階にとどまっている状況しかうかがうことはできない。したがって、日本においては特に「新石器時代」という用語は使わず、「縄文時代」としてゐるのである。その意味で、旧石器時代も先述のように「先縄文時代」とすべきであろう。

縄文時代において、日本列島一般に草創期の文化は斉一性がよく、前期に交流が活発化し、中期にその隆盛期があり、後期になると退嬰期となっていくが、関東地方の文化が西日本、九州地方に波及していき、晩期にその終末を迎えるのである。また、縄文時代の各期を通じて、東日本と西日本の文化の様相の違いが見受けられ、その現象は近代にまで及んでいるとみられる。

第2節 氷河期終了後の先史時代

	絶対年代 (C-14)	東北地方北部	東北地方南部	関東地方	中部地方東北部		中部地方南部
					長野県	新潟県	
晩 期	B.C.031±130 (千葉・荒海)	砂沢 剣吉	大洞A' 大洞A	荒海 姥山台V 杉田II	氷1	緒立 島屋 藤橋	山王 (天王山上層a)
	B.C.820±120 (大分・大石)	+	大洞C2新	安行3C	佐野 (+)	(朝日II) (朝日I)	(天王山中層b)
	B.C.870±130 青森・八幡崎 大洞 B~C	雨滝 八幡崎	大洞C1 大洞B C 大洞B新 大洞B旧	姥山台II 安行3b 安行3a		石倉 { 1 2	
後 期	B.C.1125±130 (千葉・検見川)	十腰内5	新地4 新地3 新地2 新地1	安行2 安行1	(中ノ沢)	上山	(天王山中層a)
	B.C.1240±80 (沖縄・熱田原)	十腰内4 十腰内3 十腰内2 十腰内1		曾谷	上ノ段 { 3 2 1	塔ガ峰 三仏生	鏡塚3 鏡塚2 西貝塚2
	B.C.1650±90 (沖縄・室川)		宝ガ峰	加曾利B { 3 2 1 堀ノ内 { 2 1	大畑 { 2 1	三十稲場 { 2 1	西貝塚1
	B.C.1830±150 (千葉・堀ノ内)	大湯	南境 門前	称名寺	大安寺	+	(大畑1)
中 期	B.C.2115±135 (熊本・轟) (阿高式貝層)	最花 円筒上e 円筒上d 円筒上c	大木10 大木9 大木8b	加曾利E4 加曾利E3 加曾利E2 加曾利E1	曾利 { 4 3 2 1	大平 板倉2	+
	B.C.2500±145 (静岡・尾畑) (勝坂1式)	円筒上b 円筒上a ² 円筒上a ¹	大木8a 大木7b 大木7a 樺塚	勝坂3 阿玉台3 勝坂2 阿玉台2 勝坂1 阿玉台1 五領ヶ谷 下小野	井戸尻 藤内 新道 梨久保	板倉1・馬高 + +長者ガ原	+
前 期	B.C.2780±165 (神奈川・折本) (矢上式貝層)	円筒下d ₂ 円筒下d ₁ 円筒下c	大木6 大木5 大木4	十三菩提 興津 諸磯c 浮島3 諸磯b 浮島2	晴ガ峰 下島 上ツ原	鍋屋町2 鍋屋町1	柏窪1 +
	B.C.3150±400 (千葉・加茂山 水子式)	円筒下b ₂ 円筒下b ₁ 円筒下a ₂	大木3 大木2b 大木2a	諸磯a 浮島1 黒浜 植房	南大原 有尾	泉龍寺	+
	B.C.3240±130 (熊本・曾畑)	円筒下a ₁ 深郷田	大木1 桂島	関山 ニッ木	神ノ木	刈羽	+
		ムシリBIII	室浜・上川名II	花積下層	中越	布目	木島2
早 期	B.C.5160±120 (青森・赤御堂)	ムシリBII	船入島下層	神之木台 下吉井	(+) (+) (+) (+) (+)		木島1
	B.C.5600±325 (長野・舟山)	類家 赤御堂 物見台 吹切沢	梨木畑・ 葉山IIb 上川名I・ 葉山IIa (大寺2 3 1)	茅山上層 茅山下層 鷲ヶ島台 野島 子母口 田戸上層 田戸下層 三戸		樽田・小坂平	木戸上
	B.C.6450±500 (岡山・黄島)	日計 南部浮石層 B.C.6650±250	蛇王洞	平坂 花輪台2 大浦山花輪台1 稲荷台 夏島 大丸 井草	細久保 樋沢下層 立野	卯ノ木 本ノ木 小瀬ガ沢3	平井
草 創 期	B.C.7290±500 (神奈川・夏島)	小船渡平 白浜	一ノ沢II	大谷寺		室谷	
	B.C.8135±320 (愛媛・ 上黒岩II)	ムシリBI?	一ノ沢I 日向	西鹿田 花見山	曾根 石小屋	小瀬ガ沢2 小瀬ガ沢1	

図1-1 縄文土器の型式変遷による縄文時代の分期
(藤村東男『縄文土器の知識II 中・後・晩期』考古学シリーズ15等を参考に作成)